

# 子供がいきいき学びに向かう国語科学習指導

奄美市立小宿小学校 教諭 野間 なつき

## — 目 次 —

I	研究主題	2
II	主題設定の理由	2
1	昨年度の課題から	2
2	個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実	2
3	本学級の実態	3
III	研究の構想	3
1	研究の仮説	3
2	研究の内容	3
IV	研究の実際	4
1	研究の仮説1について	
(1)	子供と共に学びを創る工夫	4
(2)	学びを創るための方法，形式を選択できる工夫	5
2	仮説2について	
(1)	自分の考えを見える化し，協働的に課題解決していく工夫	6
(2)	社会に開かれた学校，学びの場の設定	7
3	仮説3について	
(1)	「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に評価する評価シート	8
(2)	振り返りの充実	9
V	研究の成果と課題	9
1	研究の成果	9
2	研究の課題	10
VI	おわりに	10

## 【参考文献】

- 「小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 国語科編」文部科学省（平成30年）
- 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～ 文部科学省答申（令和3年）
- 「個別最適な学びと協働的な学び」 東洋館出版 奈須 正裕（令和3年）
- 「個別最適な学び・協働的な学びを実現する『学びの文脈』」 明治図書 樺山 敏郎（令和3年）

## I 研究主題

# 子供がいきいき学びに向かう国語科学習指導

## II 主題設定の理由

### 1 昨年度の課題から

昨年度の研究テーマとして、「個別最適な学び、協働的な学びを実現する国語科「書くこと」における学習指導の工夫」とし、実践を重ねてきた。その中で、以下のような課題があった。

- 「個別最適な学び」を実現させるために、教師が教材、教具、方法、環境などを適切に設定し、身に付けるべき資質・能力を踏まえた指導の充実。
- 「協働的な学び」において、考えをすべて受け入れるのではなく、批判的に解釈する力や、疑問に思うことを質問する力を身に付ける指導の充実。
- 系統的な指導を行うことで、「言葉による見方・考え方」を養い、様々な形式で自分の考えを表現することの楽しさを感じ、次の学びに生かす力を育成する必要性。

以上の課題を解決するために、特に「個別最適な学び」と「協働的な学び」を「選択」というキーワードで結び、具体的な教師の手立てを模索したいと考えた。さらに、「書くこと」に自信をもち、進んで学びに向かう子供たちを育成していきたいと考え、本年度も「個別最適な学び」と「協働的な学び」に着目しながら、「主体的、対話的で深い学び」の実現に向けた国語科の授業改善に取り組むこととした。

### 2 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

R3答申では、「授業の中で『個別最適な学び』の成果を『協働的な学び』に生かし、更にその成果を『個別最適な学び』に還元する」ことを求めている。つまり、個別最適な学びと小集団及び全体での学びとが常に往還することにより、学びが再構築されていくような生産性の高いものにしていく必要がある。そして、この二つの学びの調和を図ることが「主体的・対話的で深い学び」の実現に結び付くことが期待されている。

教育哲学者のデューイは、各教科等の枠組みを超えて学習者に立ち現れる情動が「学び」の根源的なものと捉え、それを「附随的な学習」と定位し、経験の積み重ね、学びの連続性を説いた。

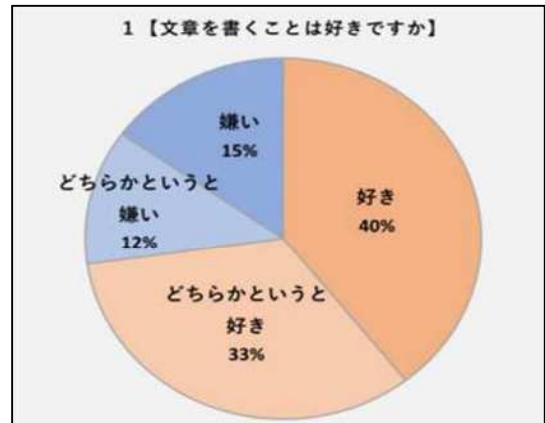
「経験」とは、環境そして教材や教具といった物的なものを媒介とした、子供と教師との相互作用と捉えている。また、デューイは、学習者である子供たちは生来アクティブな存在であるという認識に立ち、子供たちの「興味」というものを重視する。その「興味」とは、「話したい」「作りたい」「伝えたい」「より美しく」の四つが中核をなしているこれらのことから、子供の「興味」を引き出し、教科等の枠組みを超えた学びを実現していくことが今の教育にも求められていることと考えられる。

以上のことから、子供たちと「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を往還しながら、子供の「興味」を引き出し、あるときには教科等の枠組みを超えながら身に付けるべき資質・能力の育成を図っていくことが重要であることが言え

る。さらに、身に付けるべき資質・能力を中心に据えた指導と評価の一体化を図ることが重要である。そこで、本年度は、この「個別最適な学び」と「協働的な学び」を往還しながら「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、単元全体を子供と共にデザインしながら構想していくこととした。

### 3 本学級の実態

本学級は男子 16 人、女子 19 人、計 35 人の 3 年生である。まず、子供たちに自分の考えを書くことについてのアンケートを取った（図表 2）。およそ 4 分の 3 の子供たちが、自分の考えを書くことが好きであることが分かる。主な理由を見ると、「自分の気持ちを伝えられる。」「褒めてもらえる。」という意見が多かった。また、文種としては、日記、観察文、手紙といった順で書くことが好きだと答えていた。このことから、子供たちが生活や学習の中で多く取り組んでいるものを書くことが好きだと感じているようである。反対に、嫌いな理由をまとめると、「人に見られるのが嫌。」「読み直したり書き直したりすることが大変。」「時間がかかる。」「どのように書いたらよいか分からない。」という意見が多かった。



【図表 1 「書くこと」についてのアンケート】

国語科において「書くこと」は、「読むこと」や「話すこと・聞くこと」といった領域や言語事項においても重要な役割を果たす。そこで、本年度は、「書くこと」を中核に置きながら子供たちが主体的に自分の考えを表現し、身に付けた力を実感できるような国語科の授業改善を目指して研究を行うことにした。

## Ⅲ 研究の構想

### 1 研究の仮説

仮説 1	子供たちの実態に応じて教師と子供が共に学びをデザインすることで、単元の見通しをもちながら主体的に学びに向かう子供を育成できるのではないか。
仮説 2	自分の考えを見える化したり、学びの場や地域の人材を活用したりすることで、他者と協働しながら自己の学びを深めていくことができるのではないか。
仮説 3	身に付けるべき力を明確にし、振り返りを充実することで、指導と評価の一体的な充実を図ることができるのではないか。

### 2 研究の内容

#### 【仮説 1 について】

- (1) 子供と共に学びを創る工夫
- (2) 学びを創るための方法、形式を選択できる工夫

#### 【仮説 2 について】

- (1) 自分の考えを見える化し、協働的に課題解決していく工夫
- (2) 社会に開かれた学校、学びの場の設定



【仮説3について】

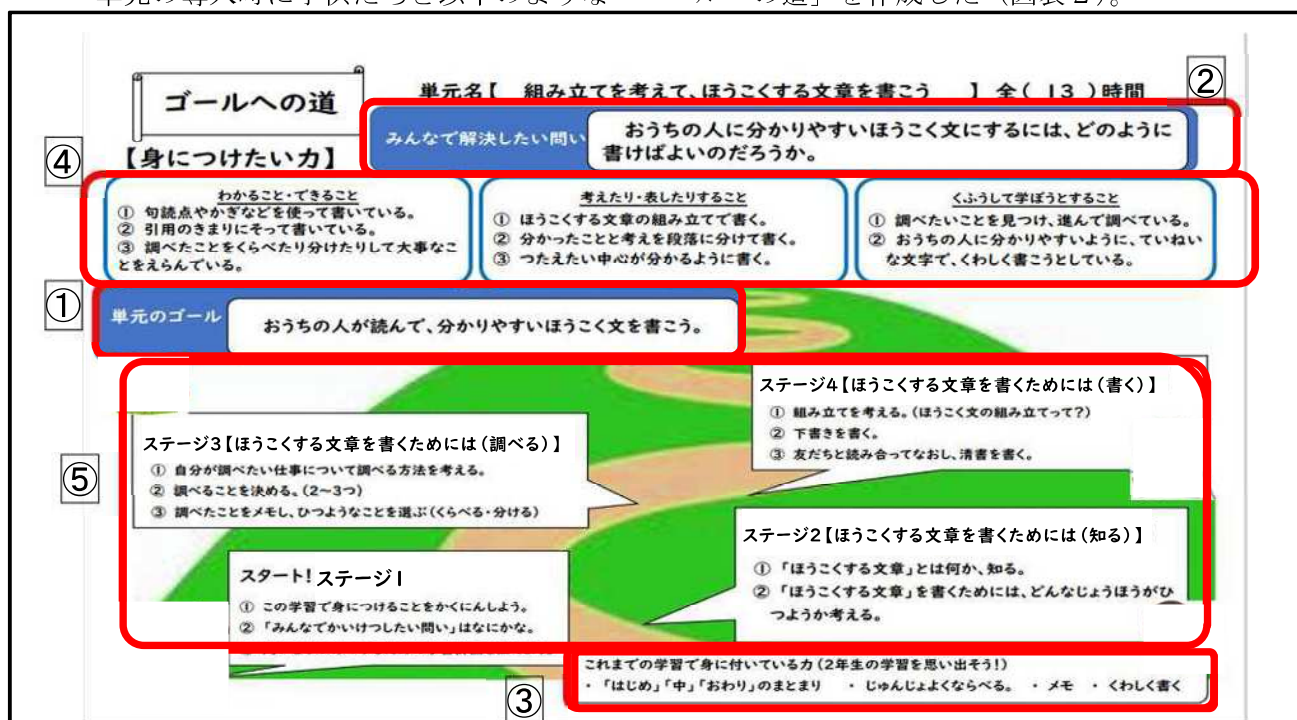
- (1) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に評価する評価シート
- (2) 一単位時間と単元末の振り返りの充実

IV 研究の実際

1 仮説1について

- (1) 子供と共に学びを創る工夫

子供たちと共に学習を創るために、単元の全体像を明確にし、その道筋を山登りと見立て、ゴールへ到達するためにどのような過程が必要か、そのためにはどのような力を発揮して課題解決していくかという見通しをもたせることが大切だと考えた。そこで、単元の導入時に子供たちと以下のような「ゴールへの道」を作成した（図表2）。



【図表2 単元のゴールまでの道筋をイメージさせる「ゴールへの道」】

まずは、単元名や教材名から相手意識、目的意識をもちながらゴールとなる言語活動を設定する(①)。次に、このゴールを達成するための課題を出し合い、学級としての単元全体の学習課題を設定する(②)。そして、既習事項を提示することで、この単元でも活用できそうな力について子供たち自身が意識することができるようにした(③)。さらに、この単元において身に付けたい力を提示した(④)。左から、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱を基にした指導事項を当該学年の実態に応じた言葉に変換し、提示した。どんなことができるようになればいいのか、この学習で何をを目指すのか、教児共に共有することで、子供たちもこの視点を意識しながら学習に臨むことができる。このことは教師自身の評価にもつながり、指導と評価が一体となった学習を展開できると考えた。

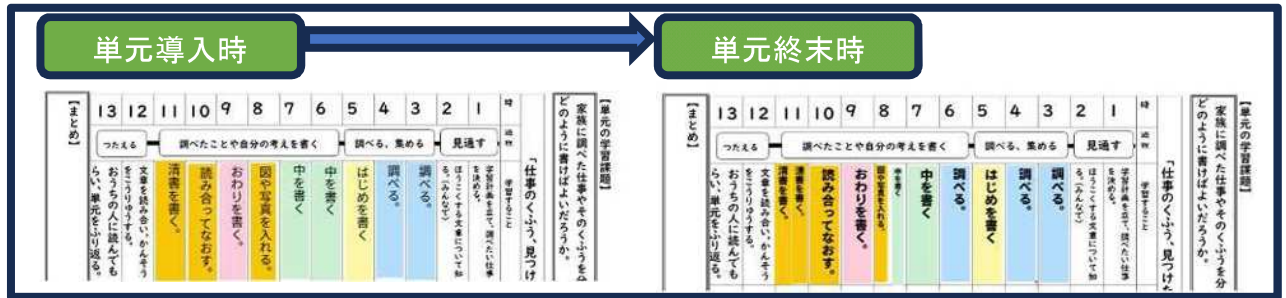
最後に、単元のゴールに向かい、自分の問いを基にしたステージを設定した(⑤)。そうすることで、ゴールに向かってどのような学びを進めていけばよいか、子供自ら学びをプロデュースできると考えたからである。



【写真1 学習計画を立てる子供】

学級全体で確認した「ゴールへの道」を基に、子供たちに個別の学習計画を設定させた(写真1)。一人で計画する、ペアやグループで話し合うなど、自分に合った学習計画を立て、単元内で自由に計画を更新しながら学習に取り

組むことができるようにした。色分けしてある部分は、子供たちそれぞれが計画する。文章構成や共有場面などは全体で学習した方がよい内容は一斉指導を行うが、個々に調べ、書く活動では基本的に自由進度学習を行った。また、途中全体指導で確認したり指導したりする場面も意図的に設定した。以下は、同じ子供の学習計画である。進度によって計画を更新し、自分で学びを調整しながら学習を進めていた(図表3)。

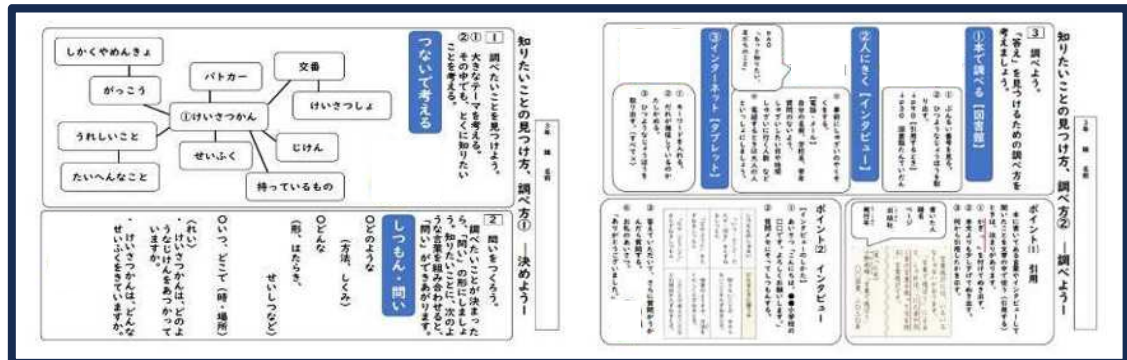


【図表3 学習計画表】

(2) 学びを創るための方法、形式を選択できる工夫

個別最適な学びを実現する上で、子供たちのニーズや実態に応じた方法を選択することはとても大切なことである。なぜなら、子供たちが主体的に学習に取り組むためには、「やってみたい」「できそうだ」という願いや自信が学びを支える上で重要となるからである。そこで、学習の様々な場で選択できるような手立てを行った。

まず、調べる資料の選択である。本やインターネット、インタビュー等、子供たちが情報を得る手段は、以前と比べると格段に増えた。その中から、自分の目的に応じた資料を取捨選択することが大切である。そのため、図表4のような資料を子供たちに提示し、情報を得る際、活用する際のヒントとした。これは国語科だけでなく他教科等でも汎用的に

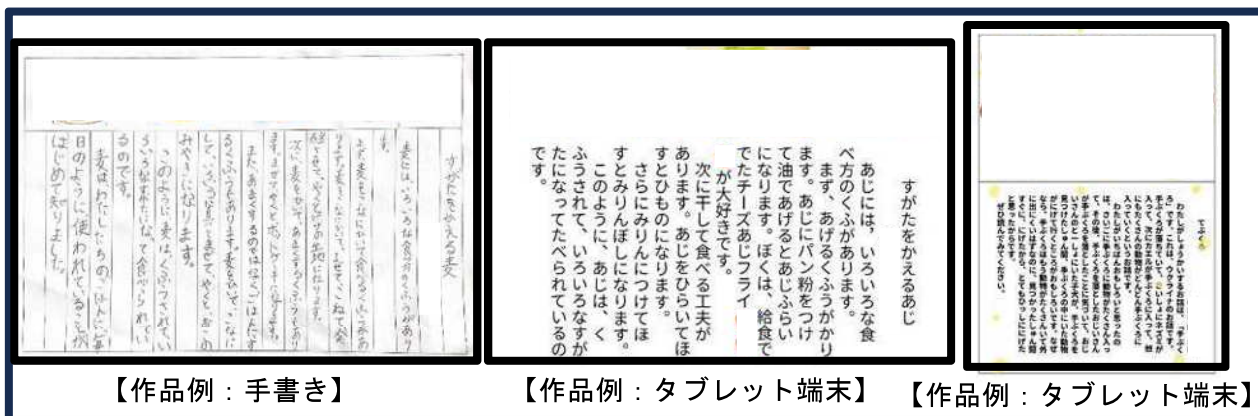


【図表4 知りたいことの見つけ方・調べ方】



使えるため、常に教室に掲示し、調べ学習等でも活用してきた。

次に、表現方法を選択させた。これまでの国語科の授業で子供たちを悩ませていたものの一つに、「下書き→推敲→清書」というように、何度も自分の考えを書かされるといったものがあった。高学年になると、文章量も多くなり、少ない時数の中で、子供たちは自分の意見を持ち、時間内に大量の文章を書かなければならず、次第に「書くこと」自体に苦手意識が生まれてくる。子供自身が「選択」できるようにすることで、抵抗感を軽減できるのではないかと考え、手書き、タブレット端末とそれぞれ自由に選択できるようにした（作品例）。



タブレット端末は、自分の書きたいことがすぐに反映され、カラーで見栄えもよい。加除修正がしやすいため、「書くこと」への抵抗感が軽減された。また、友達の書いた文章を手軽に読むことができ、推敲や自分の文章作成にも有効であった。さらに、何枚でも印刷することができるよさもある。一方で、手書きがよいという子供は、自分の文字で相手に伝えたいという思いがあったため、選択できるということがそれぞれの思いに沿った学びにつながった。

## 2 仮説2について

### (1) 自分の考えを見える化し、協働的に課題解決していく工夫

自分の考えを可視化し、協働的に課題を解決していくことが、自分の考えを広げたり深めたりすることに効果的であると考えた。そこで、モデル文をはじめ（黄色）、中（青）、終わり（ピンク）で色分けし、文章構成の中でどのような書き方が望ましいのか考え、自分の文章にも生かすことができるようにした。子供たちには、下書きの際、同じように色分けした用紙に、「はじめ」「中」「終わり」の三つに分けて書いたり、ロイロノートで記述する際にも色を指定した下書きを書いたりすることで、文章構成を意識させた。下書きがしっかりできると、あとは丁寧に清書する、タブレット端末であればコピーと貼り付けでつなげていくだけなので、容易に清書ができる。このこ

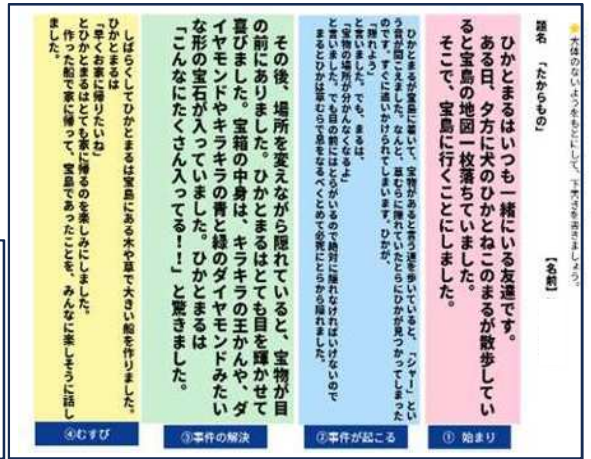


【写真2 モデル文と清書を書く子供】

とにより子供たちの「書くこと」に対する苦手意識が軽減されていった。「書く」ことが苦手な子供たちにとっては、「書けた」「できた」という積み重ねが「書くことっておもしろい、楽しい」という思いにつながっていたように感じた。



【写真3 物語を書く学習における清書】



【写真4 物語を書く学習における構成メモ】

(2) 社会に開かれた学校、学びの場の設定

子供たちの「興味」を引き出し、協働的な学びを展開していく上で、他教科等との関連を図り、様々な人材を活用することはとても大切なことである。そこで本年度は、様々な人材に協力をいただいた。光村図書の第3学年「組み立てを考えて、ほうこくする文章を書こう」教材「仕事のくふう、見つけたよ」の学習では、保護者に協力をもらい、インタビュー会を設定した。まず、子供に調べたい仕事のアンケートを実施、小宿小の近くの駐在所の警察官、給食センターの栄養教諭、校長先生にも参加依頼を出し、6月の土曜授業時に総勢16人の保護者に参加していただいた（写真5）。



【写真5 6月「仕事のくふう、見つけたよ」インタビュー会】

また、「すがたをかえる大豆」の学習では、栄養教諭に出前授業をしていただき、子供たちが調べた食材を献立に生かしていただくという目的で調べ活動を展開した（写真6）。地域人材を活用することで、子供たちの「興味」を引き出し、更には言語活動に必要感が生まれた。学校で学びを閉じることなく、様々な人やものと連携することで、学びは広がりを見せ、深まっていくと考える。



【写真6 10月「すがたをかえる大豆」出前授業】



【写真7 教室横の「まなべるうむ】

さらに、学びの場の工夫として、学年の先生方と協力していただき、空き教室を「まなべるうむ」として開放し、授業や休み時間に活用した（写真7）。各教科等での学びを反映させ、授業



中も自由に行き来することで、教室以外の学びの場が広がり、子供たちは意欲的に学習を展開していた。また、個人、ペア、グループと、学ぶ相手を選択することができるようにしたことで、到達したいゴールに向けて自己調整しながら時には一人で、ある時は仲間と課題を解決しながら学びを広げ、深めていくことができるよう指導した。



【写真8 机やいす、図書館資料などを配置】



【写真9 教科コーナーで既習事項を掲示】

### 3 仮説3について

(1) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に評価する評価シート

単元の導入時に作成した「ゴールへの道」では、「身に付ける力」として、評価の観点を子供たちと共有した。その際、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」を確認するだけでなく、「どのように評価していくか」までを視野に入れることを大切にしました。評価の観点を教児共に共有しておくことで、子供たちにとっても身に付けるべき力が明確になり、そこに向かう方法は異なっても、個々の実態に応じて山登りを進めていくことができる。そこで、各単元において評価シートを作成し、子供たちの下書き、推敲、清書時に活用することにした。評価シートは、系統を踏まえ、身に付けるべき資質・能力を明確にし、当該単元で何を主として身に付けるべきか軽重を付けながら子供たちと共に作成した。以下は、書くことの1学期と2学期の単元の評価シートである(写真10)。

くふうして学ぼうとする点	考えたり・表したりすること	わかること・できること	家族	自分
① 調べたいことを見つけて、進んで調べている。 ② おうちの人に分かりやすいように、ていねいな文字で、くわしく書いている。	① 調べたいことを見つけて、進んで調べている。 ② 引用のきまりにそって書いている。 ③ 調べたことをくわしく書いている。 ④ 調べたことをくわしく書いている。	① 句読点やかぎなどを使って書いている。 ② 引用のきまりにそって書いている。 ③ 調べたことをくわしく書いている。 ④ 調べたことをくわしく書いている。		

1学期「仕事のくふう、みつけたよ」

くふうして学ぼうとする点	考えたり・表したりすること	わかること・できること	友だち	自分
① 調べたいことを見つけて、進んで調べている。 ② おうちの人に分かりやすいように、ていねいな文字で、くわしく書いている。	① 調べたいことを見つけて、進んで調べている。 ② 写真や絵などを文章に合わせて使っている。 ③ れいのじゆんじよに気をつけて書いている。 ④ つたえたことに合った「れい」をあげている。	① 調べたいことを見つけて、進んで調べている。 ② 引用のきまりにそって書いている。 ③ 調べたことをくわしく書いている。 ④ 調べたことをくわしく書いている。		

2学期「食べ物のひみつを教えます」

「ゴールへの道」の身に付けたい力を評価シートに反映させ、友達や家族にも評価をもらう。

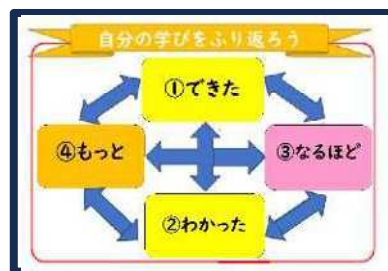
【写真10 評価シート】



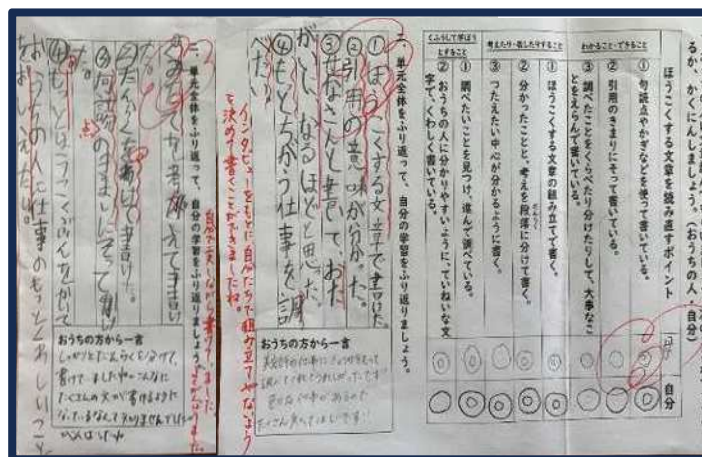
報告文と説明文を書くという文種の違いはあるため、全て同じではないが、前回身に付けた力も含め、ステップアップできるよう作成した。また、この評価シートは、自己評価、友達や教師、保護者といった他者評価としても活用し、単元内で継続的に評価することで子供たちの成長や自信につなげるようにした。

## (2) 振り返りの充実

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を振り返りの四つの視点で整理し（図表5）、その視点で振り返ることで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることができるのではないかと考えた。1単位時間においてはノートの右端にめあて、終末に振り返りを四つの視点で書くことにした。また、単元の終末には、写真11のように、評価シートと共に単元全体を通して自分の学びを振り返って書くことができるようにした。その際、単元初めに書かせた試しの文章と単元末の文章を比較させることで、自分の学びや成長を実感することができるようにした。また、自己評価だけでなく、友達や教師、保護者からの評価など、他者評価を加えることで、称賛される喜びを感じ、次の学習の意欲につながるようにした。



【図表5 振り返りの四つの視点】

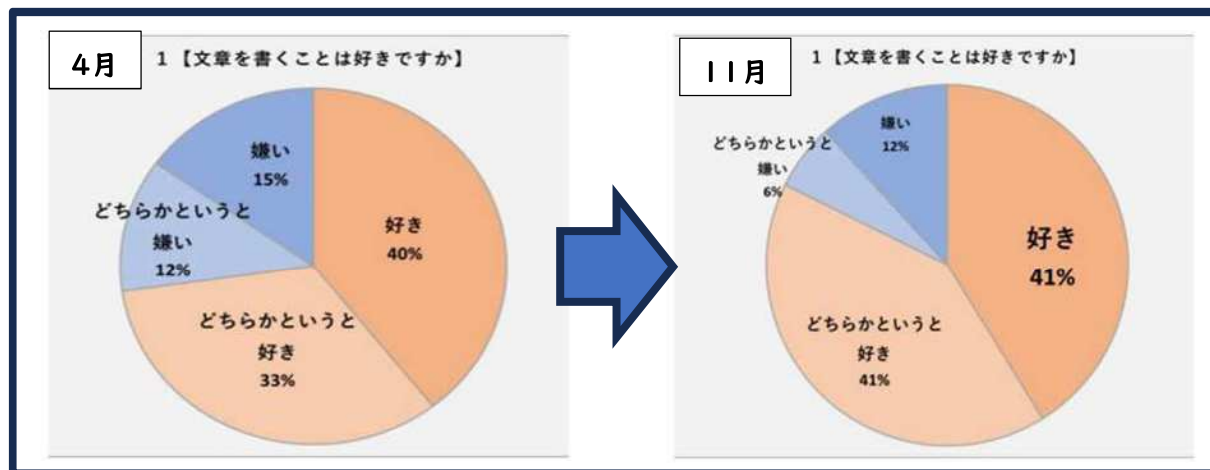


【写真11 単元末の振り返り】

## V 研究の成果と課題

### 1 研究の成果

学年当初にとったアンケートと同じアンケートを二学期末にとり、比較した。自分の考えを書くことについて肯定的な意見をもつ子供が増えたことが分かる。



【図表6 アンケートによる子供の変容】

これまで、「書く」という行為に対して苦手意識をもっていた子供たちだが、タブレット端末の活用や友達との学び合いの中で、苦手意識が少しずつ薄れていき、書き方を身に付けたことにより、「書く」ということへのマイナスイメージがプラスに転じてきたのではないだろうか。また、日常的に書き綴っている日記について毎月日記自慢大会を行った。視点を与えることで、文章のどの部分に気をつけて評価し、称賛すればよいか分かってきた。またそれは自分が書く場合にも転用され、相乗効果を生んだ。

以上のことから、

- 自分で学習計画を立て、学習をどのように展開するのかを子供たち自身で決め、実施していくことができ、主体的に学びに向かう姿が見られた。また、身に付けたい力を共有することでこの単元で何を大事にすべきかが明確になった。
- モデル文、調べ方、表現方法、場や形態を工夫し、子供自らが選択することで、自分の学びを調整しながら粘り強く取り組む姿が見られた。また、子供同士でよさを発見し、承認し合う活動によって書くことに意欲をもって取り組むことができた。
- 評価シートを用いることで、どんな力が身に付いたのかが明確になった。さらに、国語科での学びが総合的な学習の時間の発表でも生かされ、報告文や説明文の組み立てを使ってスライドを制作することができ、身に付けた言葉の力を汎用的に活用することができるようになってきた。

## 2 研究の課題

- 学習の進度が様々なので、個別の対応が難しい場面があった。学習の進め方や課題を解決した後の活動など、綿密な計画や手立てを教師側が準備したり、子供の進度に応じた課題設定の在り方を更に研究したりする必要がある。
- 書く活動の中で、子供たち同士での推敲の力がまだ育っていないため、内容面にまでアドバイスし合うことが難しい場面が見られた。また、評価シートの項目についても更なる改善が必要である。
- 調べ学習においてインターネットにおける情報の取り扱い方が難しかった。正しい情報なのか、どこからの情報なのか子供たち自身による判断が難しかった。子供たちの情報収集能力と共にどの情報をどのように扱うか考えていく必要がある。

## VII おわりに

本年度は、子供自らが単元の学びをデザインしていくという視点で実践を重ねてきた。多くの課題はあるが、子供がいきいきと学びに向かう姿を実感することができた。また、この方法は国語科だけでなく、他教科等でも汎用的に使える。特に学習計画を自分の力で練り、限られた時間の中で自分の学びを調整しながら粘り強く学びに向かうこと、また評価シートで当該教科の身に付けるべき力を教児で共有することで、子供も教師も目指す方向性が見えてくるのではないだろうか。教科の枠を超えて、身に付けた力を十分に発揮しながら主体的、対話的で深い学びの実現を目指した授業改善を今後も続けていきたい。